ウィリアム・ヂェイムスの認識論と形而上學

高坂正顯

ウィリアム・ヂェイムスは過去の人である、プラグマティズムは過去の學說である、と、多くの人は云ふであらう。今さら何の用あつてヂェイムスの名を掲げ、その學說に就て論ぜんとするのであるか。プラグマティズムと云ふ名稱が既に何か厭ふべきものであるかの如き感を與へつゝあるではないか。人はプラグマティズムの名を他人の學說に冠する事によつて、その學說を毀損し得たりとなし、彼は又プラグマティズムと比較さるゝ事によつて大なる侮辱を蒙つたと考へる。かくの如き時にあたつて何故にプラグマティズムに就て論ぜんとするのであるか。けだし私にはプラグマティズムに對するいくらかの同感があるからである。少くともウィリアム・ヂェイムスの思想に多少の誘引を感ずるからである。彼の思想はしかく簡單に抹殺さるべきものとは思はれない。我々にとつて尙敎ふべきものを有すると考へられるのである。しからばそれは如何なる點に於てであるか。

一

少くとも私にとつてはプラグマティズムに對する誘引は、所謂新カント學派に對する不滿足に起因する樣に思はれる。嚴密なる學的認識を誇る彼等の思想が、生ける生の問題に對して、餘りに無力である處に由來する。例へばハインリッヒ・リッケルトの思想がどこまで如實の生の眞相に觸れてゐるか。彼は生の問題に對しては常に悲壯なる斷念を繰り返へさざるを得なくはないか。私は今、ヂェイムスが認識と實在とに就て如何に考へたかを述べるに先だち、それに關するリッケルトの思想の難點を明かにし、よつて以てヂェイムスの思想の特色を證する前提としたいと思ふ。私がリッケルトを特に選んだのは、それは彼が嚴密なる學の哲學の辯護者として、生の哲學者なるヂェイムスに對立するばかりでなく、ヂェイムス*みづからも二三の個處に於て、リッケルトの主張に言及してゐるからである。**しからばリッケルト哲學の難點は如何なる點に存するのであるか。

※ リッケルトのヂェイムスに對する批評に就ては Gegenstand der Erkenntnis. S. 265ff. Die Philosophie des Lebens. S. 28, 50, 151. 等。

※※ ヂェイムスがリッケルトに言及してゐる個處は Pragmatism. P.228. 236. The Meaning of Truth. p. 266

私はリッケルト哲學の窮極の難點を、彼が主觀と客觀とを絕對に分裂せしめた處に求める事が出來はしないかと思ふ。彼にとつては主觀は永遠に主觀であつて客

觀ではなく、客觀は又永遠に客觀であつて主觀ではない。卽ち主觀と客觀との間には無限の溝渠が穿たれてゐるのである。この主觀と客觀の分裂がしかして更に彼をして、體驗と認識――その事は又生命と認識或は實在と認識の分裂を意味する事になるのである――の間に越え難い壁を築かしめ、次に具體的なる我々の意識と、意識一般との間にも同じく高い壁を造らしめてゐるのである。* 卽ち彼は主觀と客觀の間に無限に深く且つ高い壁を置いたために、生命を認識より遠ざけ、具體的なる我々の意識をば、意識一般より絕緣させる結果になつたのである。言はば到る處に於て生命を我々より遠ざける壁の哲學を主張する事になつたのである。しからばその壁は如何なるものであるか。又乘り越へ得ないものであるのか。

* リツケルト哲學に於て難ぜられるその他の對立、例へば、內容と形式、存在と價値と云ふ如きものも、その根源を同じ處に有つのではなからうか。窮極に於てそれは客觀と主觀の對立に基くのではなからうか。

「認識と云ふ概念には、認識する主觀の外に、認識される對象が屬する」とは「認識の對象」の最初の文句であると共に、彼の思想のすべてを貫く最後の思想である。知ると云ふ事はSubjekt plus Objektである。しかもこの主觀プラス客觀は永遠に一つとなる事なき二つの獨立の量として存在する。主觀はどこまで推しつめられても客觀と

なる事なき永遠の主觀であり、客觀は又永遠に主觀となる事なき客觀である。主觀と客觀をつなぐ掛橋は存在しない。主觀は客觀を知るのみで客觀となる事は出來ない。知られた客觀はもはや主觀の内にはない。知る事は我の内なるものを外に投影する事である。我は要するに我であつて我ならぬものではない。リッケルトは概念としての主觀と客觀は、概念として區別されたものである以上、永遠に合致する事は出來ない、しかし我々の體驗に於ては兩者は失はれたる樂園に於けるが如くその合一を享受する、と云ふ。しかし體驗のみが生きたものであり、認識はそれを離れて體驗するものである以上、體驗と認識は決して合一する事は出來ない。認識された生命は既に認識であつて生命ではなく、生命としての認識は、認識しつゝある生命であるであらうけれど、自らを認識する生命ではない。眞の意味に於て在る事と知る事は永遠の背離である。知る事は生命ではなく生命は知る事ではない。彼の立場にあつては知は無限の飛躍を以つてしても、在とはなり得ない。知は遂に在の影を知るのみであり、在の上に加へられた己れの暴力を認むるのみである。知は在そのものを知るのではない。主觀と客觀との間には越え難い淵がある。不透明な壁がある。形式は内容をつつむのみで内容そのものを知るのではない。形式は内

容を歪めるのみで內容をそのまゝに知るのではない。「之」と指しただけで內容の姿が變るのである。私はこゝに於て知る事が直に在る事であり、在る事の眞の意味は知る事に於て現はれる如き體系を求める。*即ち知と在との間に壁のなき世界を求める。既に自覺に於て「我考ふ」が卽ち「我在り」であるが如く、世界そのものが知る事に於て直に存在し、世界の認識が世界の體驗である如き世界を求めるのである。

* リツケルトに於て主觀と客觀の結合の成立し得ない事は、彼の所謂認識の二途たる先驗心理的方法と、先驗論理的方法とが單に互に補ひ合ふ二つの途として主張されるに止まつて、自然界の立法者としてのカントの認識主觀の思想を維持して主觀的方法の優位をとかんとしつゝも、尙兩者の並立をとく以上に出で得ざる事によつても明である。

認識と體驗との間には暗い壁がある。認識は彼にとつてはかへつて生命に暗い影を投げる事である。生命を知る事は生命から遠ざかる事である。かくの如く暗き壁の他の一つを私は個別的主觀に對する認識主觀の意味の內にも認める。彼は知ると云ふ事はあくまで知る事であつて知られる事ではないとする。知るものは要するに知るものであつて知られるものではない。知られるものは知るものではないが故に、個別的なる肉體は勿論の事、心理的なる自我も亦知られたものとして知るものゝ外に投げ出される。それ故眞に知る所のものは、時間と空間を超越し、我と彼とを超越した意識一般でなければならない。それは既に時間を超越したもので

あるが故に、それ自ら何等の變化をなす事なく、何等の働きをも働き得ざる筈のものである。それは我でもなく彼でもなきが故に、一定の自覺或は人格を有せざるは云ふまでもなく、言はゞ Träger der Wirklichkeit であり、存在の別名である。それは Ich ではなく Er でもなく、單に Es である。しかも尙それを意識一般と呼ぶのは、それが我々の意識が現實を認識するに際しての最高の制約であるからであると云ふ。それが我々の意識の最高の形式であるからであると云ふ。しかしながら意識の形式がはたして認識するものであらうか。我でもなく彼でもなき意識一般なるものは、我と彼の意識の形式であつて、それ自ら獨立に存在するものではない。單なる形式が知ると云ふ事はない。それは我々が認識する際に(普遍的なる認識が實現されてゐる限り)我々の意識が荷なふ形式であるにすぎない。言はゞ叡知的質量とも云ふべき我々の意識に於て實現される叡知的形式である。眞に知るものは、意識一般と云ふ形式を通じて知る我々であつて、意識一般ではない。意識一般が知るのであるならば、それは自ら自覺を有する神の如きものであるか、我々の意識をその部分とする叡知的絕對者でなければならない。しかしながらかくの如きものは古き形而上學として否定されるのであるから、意識一般は認識の形式と云ふ意味を有するのみのも

のでなければならない。しからば眞に知るものは我々であつて、意識一般ではない。我々が意識一般に於て表象結合を構成する事によつて知るにもせよ、或は單に表象結合を是認する事によつて知るにもせよ、知るものは我々であつて意識一般ではない。意識一般は單に我々の道具である。しかるにリッケルトに於て知るものとしてとり出されたものは意識一般であつて、具體的に知る我々ではない。知るものの形式が抽象されたのみで知るものそのものは明にはされてゐない。言はゞ知るものゝ居住する家屋と彼の通行する道路とが明にされたのみで、彼そのものは見られない。極限概念と云ふ名に於て自我に被ぶせられた假面であつて、眞に知るものは、その假面の下にある我々である。勿論彼は意識一般の代りに判斷意識一般なるものを考へ、その構造を明にするために價値と存在とを結合する第三王國として「內在的意味」の世界なるものを說き、よつて以つて眞に知るものに近よらんとするものであるが、その時に於ても內在的意味が意味である限りそれによつて理解されるものは作用ではなくして意味であり、彼の所謂 Bejahung なるものも、肯定の作用そのものではなく、その作用のもつ意味であるにすぎない。働く意味ではなくして死んだ意味である。彼の哲學の方法の導く處には、常に生命の脈動はかくれて、その影をつか

むにすぎない。彼は知るものゝ形式を敎ふるのみで、眞に知るものを敎へない。彼によつて敎へられる認識するものは、單に認識するものゝ形式であり、認識するものを隱す壁に過ぎない。我々は意識一般の奧にある眞に知る意識を知りたい。もし眞に知るものは一般的なるもの普遍的なるものでなければならないなら、その一般的なるものは、かへつて個別的なる我々の意識の意味を明にするものであり、我々の意識の完成であり、自覺であり、或は實現でなければならない。しからば個別的なる意識がそのまゝ、普遍的なる世界の一部であり、又普遍的なる認識の一部であるが如き世界があるだらうか。しかして又かくの如き世界が求められ得るであらうか。

二

私は多くの人にとつては單に淺薄と卑俗の代名詞であり、嘲笑の對象であるかの如きプラグマティズムの內に、正當にはウィリアム・ゼイムスの思想の內に、かゝる要求を滿し得べき方向の指示がある事を思ふものである。しかしながらかくの如き要求は、既にヘーゲルの思想に於てその解決が試みられ、しかもその壯大なる體系が、遂に崩壞すべきであつたと云ふ運命の內に、かゝる要求の斷念さるべきものである事が示されてゐたではないか、と云ふ人があるかも知れない。まことにヘーゲルに

於ては、知る事は在る事であり、絶對理性の一部を意味せざる如き自我はなかつた。それ故私は、ゼイムスはいかなる點に於てヘーゲルを承認し、いかなる點に於てヘーゲルの缺點を認め、而してそれを補ふにいかなる方法を以つてせんとしたかを見なければならない。しからばヘーゲルはゼイムスにとつて、いかなる意味を有したか。

"Like Byron's corsair, he [Hegel] has left a name 'to other times, linked with one virtue and a thousand crimes.'" P. 88 A Pluralistic Universe とゼイムスは云ふ。語り傳へらるべきヘーゲルの功德とは、進展する宇宙を直觀した事であり、無數の罪過とは、その進展する宇宙の直觀をば、ディアレクティークの誤用によつて絶對なる理性の內に消滅せしめた事であると云ふ。しからば、それは如何なる意味に於てゞあるか。

樣々なる場所に於てヘーゲルに對して試みられたヂェイムスの批評は、それを總括すれば、時間的なる過程に於ては正しきディアレクティークが、單なる概念のディアレクティークとなる事によつて、その時間性、歷史性を失ひ抽象の遊戲と化したと見るにある。ヂェイムスは決してディアレクティークそのものを否定しやうとするのではない。むしろ彼はすべてのものがかりそめのものである事、現實が常に不斷の破壞と否定と、しかしてその破壞と否定の間から再生し再來し來る創造の過程

である事を信ずる。家庭の生活も社會の生活も、道德も宗教も、絕えず自分の內に否定と創造とを含む劇的なる爭鬪であるのである。彼は人生は dramatical であると云ふ事を屢々口にする。そしてこのすべてのものをかりそめのものと見る "essential provisionality of things" A Pluralistic Universe P. 89. 思想こそ、ヘーゲルの思想を魅力あらしむる所以であると云ふ。彼がヘーゲルを偉大なるイムプレッショニストと呼ばんとするのも "His mind is in very truth impressionistic. A Pluralistic Universe. P. 87" かゝる萬物轉生の直觀の故である。しからばかゝる深き直觀の上に立つヘーゲルのディアレクティークは何故その時間性をすてゝ單なる概念の遊戲に墮落するか。しかしてその窮極に於て、遂にディアレクティークそのものを否定する如き立場に達するのであるか。かつ又宇宙が現在に於て既に完成せるものであるかの如き口吻を洩すに到るのであるか。

ヂェイムスによればそれはヘーゲルが概念の本質を誤解して、感覺的なるもの、時間的なるものとの關係に於てのみ意味を有し得べき概念を、その土臺とも云ふべき感覺的なるものから引きはなして、それ自身獨立の意味を有し得るとなした點にある。元來概念的なるものは、感覺的なるものを離れては意味が無いとヂェイムスは

考へる。概念的なるものゝ意味は感覺的なるものを統一してゐる點に存する。例へば我々が物と云ふ概念を有する時、その概念の意味はどこにあるか。母親の手に抱かれて、無邪氣に玩具を弄ぶ幼兒には、未だ物と云ふ概念は明白には現はれてはゐない。彼がその玩具をとり落したならば、彼にはその玩具は消失してしまつたのである。彼には蠟燭の火が吹き消された如くに消滅したのである。そして母親によつて再び彼の手に與へられた時には、あだかも蠟燭に新に火が點ぜられた如く、彼には玩具が新に出現したのである。かくの如き漠然たる意識の狀態から、除々に明白なる物の概念にまで到達した時に、その概念の有する意味とは何であるか。彼が一度物の概念に到達したならば、彼はもはや眼前より玩具が見えなくなつた事を以て、玩具そのものが消滅したとは考へないであらう。彼は單に玩具が床に落ちたと考へるであらう。或はどこかに紛失したとは考へるであらうけれど、彼は決してそれを以つて、玩具が全く消滅したとは考へないであらう。かくて彼は茫然と玩具の消滅に驚く幼兒ではなくなり、熱心に玩具の行衛を探す小兒となつたのである。卽ち物と云ふ概念は、彼をして何等かの場所に玩具の存在を信ぜしむるに至り、且つ彼をしてその行衛を探がさしむるに至つたのである。彼にとつては玩具によつて與へ

られる感覺的なるものは、單にその時限りの存在をもつ一時的のものとは異り、他の時にまで連續を保つ新なる統一となつた。概念の有する意味とはかくの如くに感覺的なるものとの關係に於てそれに新なる意味を與へる點にある。しかしてかくして創造され來つた新なる意味は、それに對して働きかける我々の働の相違の内に、その反映をもつのである。この事は、物體、或は因果と云ふが如き所謂範疇概念に於てのみならず、樣々の自然科學的概念に於て明白に見られ得る事なのである。一言にして言へば感覺的なるものは概念的なるものによつて統一される事によつてその意味を深め、概念的なるものは感覺的なるものに於て己れの意味を實現し、かくて互に互をまつて、互の意味を深めて行くのである。兩者は言はゞ相互作用の關係に立つのである。しかるに――と、恐らくヂェイムスは考へる――ヘーゲルはかゝる感覺的なるものとの關係に於てのみ意味を有し得る概念的なるものが、感覺的なるものに對して統一的なる意味を有し、それに對して指導的なる位地に立つが如くに考へらるゝが故に、それ自ら獨立の在在を有するかの如くに誤信し、かくて遂に抽象的なる概念の獨立を主張するに到つたのであると。勿論ヘーゲルは之に對して、彼の概念が決して抽象的なるものではなく、それが最も具體的のものである事を抗辯

するであらう。具體的なる概念を發見した事が、彼の功績であると云ふでもあらう。しかしながら具體的とは何を意味するのであるか。ヘーゲルは具體的なる概念とは特殊を含むんだものであると云ふ。しかしながら單に雜多なる特殊が概念をして具體的たらしむるのであるか。眞に概念をして具體的ならしむる特殊は、單に切れぎれなる特殊ではなくして、それ自ら互に連續し行く流動でなければならない。それはベルグソンの持續であり、流れる時に於てあるものでなければならない。ヂェイムスは「時間はいかなるものにましても實在的である」A Pluralistic Universe P. 49と云ふ。しかして感覺的なるものとは、かゝる時間に於てあるものである。それ故もしヂェイムスの意味に於てヘーゲルの概念が具體的のものであらうとするならば、その概念は常に時間的なるものとの關係に於て立つのでなければならない。ヘーゲルの概念ははたしてかくの如き意味に於て具體的であるだらうか。それがはたしてヘーゲルの正しき理解であるかどうかを私は知らない、しかしヂェイムスは、ヘーゲルの概念は、かゝる具體性は有しないと云ふのである。たとへヘーゲルの概念がどれほど特殊なるものを含んだものであるとしても、それは眞に特殊なるもの、即ち、流れる時に於てあるものを取り逃してゐると考へるのである。かくてヘーゲ

ルの概念は、時間性と歴史性とを失つた單なる抽象に墮したのであるとヂェイムスは主張する。しかしてそれと共に、元來感覺的なるものと概念的なるものとが互に互を制約し、互に互の上に飛躍し、かくて感覺的なるものと概念的なるものとの間に成立してゐたディアレクティークは、その不可缺の一要素である感覺的なるものを棄て去る事によつて、單なる抽象のディアレクティークとなつたのである。ヘーゲルのディアレクティークはかくして成立する。それ故、時間の終極に於て見るべき the Ulimate は、時間を超越した現在に於て the Absolute として既に與へられ終つたものとなる。彼の哲學には未來はない。すべてはもはや與へられ終つてゐるのである。彼の哲學に於ては可能と偶然と新奇とをとく餘地はない。すべては既に決定されてゐるからである。しかしてまたその故に彼の哲學に於て自由を見る事は出來ないのである。我々はかくの如き世界に滿足し得るであらうか。

※　かくの如くにヂェイムスの思想は感覺的なるものと概念的なるものとの間に、相互限定をとくのである。この點より見ればヂェイムスの思想は、"Gedanken ohne Inhalt sind leer, Anschauungen ohne Begriffe sind blind" K. d. r. V. s.75. と叫んだカントの思想に幾分の類似を有しはしないか。

勿論多くの人は相對と云ふ概念が既に絶對と云ふ概念を要求し、時間的と云ふ概

念が既に超時間的と云ふ概念を要求すると云ふでもあらう。まことに、雜多と云ふ概念が統一と云ふ概念を求め、疑惑と云ふ概念に既に確信と云ふ概念が伴ふてゐるであらう。ヂェイムスとてもこの事を知らないのではない。否インテレクチェアリズムの最高の武器は、眞理を否定せんとする試そのものが、眞理を前提してゐるが故に、眞理を否定する事は不可能であると云ふ點に存する事をもわきまへてゐるのである。しからばヂェイムスはそれにも關はらず、尙何故に、ヘーゲル流の絕對的觀念論にくみしなかつたのであるか。

部分と云ふ概念が全體と云ふ概念を要求する事は事實である。しかしながら要求されたものは、要求されたが故に必らず存在しなければならないのであるか。現在と云ふ言葉が未來と云ふ言葉を要求するが故にとて、未來も亦現在と同樣に存在してゐるのであらうか。また不完全と云ふ事に對しては完全と云ふ事が考へられる。しかしその故に不完全なるものはそのまゝ完全なるものになるのであらうか。ヂェイムスはいつでも現實から理想へ部分から全體に向はんとする。理想はカントの言葉を借りれば――この言葉はしかも屢々ヂェムスの借用する所のものである――gegebenではなくしてaufgegebenである。そしてそれがaufgegebenである限り、理

想的なるものは常に現實的のものに對して課せられてゐるのである。理想があつて現實があるのではなくして現實があつて、その內に理想があるのである。ヂェイムスはそれ故絕對と云ふ言葉で相對をうのみにし、一と云ふ言葉で雜多を抹殺する事を恐れるのである。彼とて理想がないと云ふのではない、たゞ現實の發展の內に理想を見んとするのである。それ故宇宙がいつかは絕對となる事を否定するのではない、たゞ現實の宇宙がそのまゝ絕對であると云ふ事を避けるのである。

元來絕對と云ふ言葉は誤解を伴ひ易い。その故は絕對と云ふ言葉で單に概念的認識の及び得ざるものゝ事が考へられ、かくて直接に與へられたものがそのまゝ絕對的なものと考へられ易いからである。正確に言へば單に非合理的と呼ばるべきものが、概念の無力の故に直に絕對視されるのである。ベルグソンの持續の如きものにもかゝる早急な結論がありはしないか。勿論かゝる直接の所與は、それを概念的認識が完全に支配し得ない、否、場合によつては無力であると云ふ點に、それが絕對であると呼ばれる一面の理由はあるであらう。しかしながら、その事は、かゝる與へられたものが、價値の立場からしても絕對であると云ふ理由にはならない。むしろ概念的認識がそれを支配し得てゐないと云ふ點に、かへつて認識の價値の立場から、

殘された問題がある。そこにむしろ價値の立場からしての絶對への隔離がありはしないか。またもし與へられたものが認識の立場から完全に理解され、かくて認識が絶對の完全に達したとしても、それが同時に、倫理的なる意味に於ける絶對への到達を意味し得るか。とまれヂェイムスは宇宙を既に絶對とは見ずに、絶對へ進み行く過程として理解せんとするのである。しかしてかゝる宇宙の構造を理解するために概念の分析をすてて、かへつて直接經驗の流動に身を投ずるのである。彼の立場は、彼自ら Radical Empirism と呼ぶ如き經驗的なる立場である。しからばそれは如何なる立場か。

ヂェイムスはヘーグル的なる一元論を攻擊するのに、その他種々なる理由によつてゐる。その內最も困難なものは、總じてかゝる立場から如何にして惡の問題、不完全の問題が解釋さるべきかである。現實の世界に不完全がある事は否定出來ない。(元來我々が思索し、論究すると云ふ事が我々が未だ完全には知らざる事を意味し、從つて現實に不完全が存する事を證明するのである)。絶對なるものが不完全なるものを有すると云ふ事は絶對者を相對化する事である。しからば絶對者は本來不完

全を有しないのか。ヘーゲルの言ふ如く、"The consummation of the infinite aim consists merely in removing the illusion which makes it seem yet unaccomplished." P. 51. A pluralistic Universe となし、不完全を我々のイリュウヂョンとするのは、イリュウヂョンと云ふ事が、とりもなほさず不完全の存在する事であるから解決にはならない。之と同じ意味に於て "Qua absolute the world is one and perfect, qua relative it is many and faucty, yet it is identically the same world—" P.47 となす事も解決にはならない。絶對より見れば完全であるならば、それを相對より見る必要がどこにあるか。神が頭に描き、或は神のみがそれを見る世界は完全なものであるならば、何故神は、我々も亦それを見かくて不完全なる象面を宿す世界を造り出したか。かくてはロッチェの云ふが如く神の「計畫そのもの」は驚嘆すべきものであつたらうけれど、それは實在に飜譯せられる事によつて、不完全になるのである。惡の問題は一元論に於ては解決し難い。

此の難點より脱するために、絶對的なるものは、相對的なるものを離れてあるのではなく、文字の結合に於て文章があり、目、鼻がそろつたのが顏である如く、絶對者は顏或は文章であり、我々は目鼻、或は文字であるとなしても、それは尙何等の解決をもたらすものではない。まことに絶對者は我々を離れてあるのではないのでもあらう。

我々を言はゞ mere syllables in the mouth of Allah と見、アラーの神に於て始めて完全な文章となると云ふ思想は、絶對と相對を巧みに結ぶものであるではあらう。しかし觀念論にとつては依然として解決を與へるものではあり得ない。けだし觀念論にとつては觀念の爲方はやがて觀念するものゝ存在の形式を示すのであるから、言はゞ文字として部分的な觀念の爲方をするものは、部分的な存在であり、文章として總括的な觀念の爲方をするものは、全體的な獨立な存在であるからである。千の有限者は不完全なるものを見、彼等には分裂せる世界が現はれるけれども、彼等は總體に於ては完全なるものを見、完全が現はれるとするならば、完全なるものを見るものは、單に千の有限者の總括ではなくして、言はゞ彼等を己れの部分として內に宿す第千一番目の絕對者でなければならない。觀念論にとつてはいかに見るかはいかに見る者があるかを示すからである。(P. 198-200. A Pluralistic Universe)

尙ゼイムスはヘーゲルの立場に於ては如何にして普遍より特殊を演繹し得るかを解し得ない事をも難んじてゐる。(P. 126-129. A Pluralietic Universe) その他ヂェイムスのヘーゲルに對する批評については The Will to Believe 中の論文 On some Hegelisms P. 263 ff. を參照されたい。

三

リッケルトの哲學に於て、我々は主觀と客觀を遮る高い壁に出會つた。知る者と知られるものとの永遠の剰離に出會つた。それは又體驗と認識を分つ溝にもなつた。そして體驗に於てのみ直接に接し得る「認識する我」の代りに、單に「認識する我」の形式たる意識一般を獲る事を以つて滿足せねばならぬと云ふ結果に立到つたのである。言葉を替へれば認識論的なる意味に於ける壁を主觀と客觀の間に見出し實在に關する意味に於ける壁を、體驗と認識の間に見出したのである。言はゞそれは壁の哲學であり、飛躍の哲學（Saltatory）である。飛躍なくしては、彼等はそれを飛び越える事を得ない。しかしながら我々は一方、主觀と客觀を遮る壁もなく、他方、體驗と認識を遮る壁もなき哲學を求める。言はゞ一方から一方へ壁を飛躍する事なくして連續的に移り行き得る連續的なる移動の哲學（ambulatory）（Meaning of Truth P. 138. 139.）參照を求める。しからばかくの如き哲學は可能であるだらうか。

我々はかくの如き要求を滿すかに見えるヘーゲルの哲學が、ゼィムスにとつては、餘りにも不當なる感覺的なるものゝ蔑視のために、抽象的なる概念の哲學となり、それと共に、時間的なる宇宙のディアレクティークが超時間的なる形式のディアレク

ティークとなり、かくて進行しつゝある宇宙の歴史の發展が止められ、絶對なるものゝ内に於て、既に永遠なる完成を享受しつゝあるかに見らるゝが故に、之又採用しがたきものなる事を見たのである。ゼイムスにとつては概念的なるものは完全に感覺的なるものを呑了し終る事は許るされない。概念的なるものは常に感覺的なるものとの連續に於て見られなければならない。感覺的なるものは概念的なるものに飛躍的に沒入する事は出來ない。兩者は互に連續し移動し得なければならない。しかしてこの認識論的なる移動の立場に伴つて、實在的にも、感覺的なるものと概念的なるものとの間に絶えざる移動の進展が見られ、かくて宇宙そのものが移動しつゝある歴史として見られるのでなければならない。しからばゼイムスの哲學はよくかくの如き課題を解く事が出來るであらうか。しかして又いかなる立場と方法とによつてゞあるだらうか。

四

普通にウイリアム・ヂエイムスの思想の特色と考へられてゐるプラグマティズムは、此の課題を解くべき方法であり、しかして此の方法を適用するに Radical Empirism の立場を以つてするのである。しからばプラグマティズムとは如何なる方法であ

り、根本經驗論とは如何なる立場を意味するものなのであるのか。

Radical Empirism とは、まづ直接に經驗され得るすべての要素をその體系の内にとり入るゝと共に、直接に經驗されざる要素はいかなるものとても、その體系の外に驅逐せんとする處のものである。(P. 42. Essays in Radical Empiricism) 此れが根本經驗論を基礎づける要請である。合理論者がやゝもすればその存在を抹殺せんとする非合理的なるもの、反價値的なるもの素材的なるものを認むると共に、合理的なるもの、價値的なるもの、形式的なるものに對しても、それが直接に經驗さるゝものである限り、一般の經驗論者と異つて、その意義を認めんとするものである。それは經驗的なるものから出發すると共に、あくまで經驗的なるものゝ内に止まらんとするものである。例へばヂェイムスが神を論ずる時には、それは經驗される神であり、又經驗され得る限りの神である。彼は神を否定するのではない、たゞ人間の經驗に現はれざる如き神に就てはそれを論ずる事を避けるのである。しからば直接に經驗するとは如何なる事を意味するのか。そも〳〵經驗に於ける直接性とは何であるか。

ヂェイムスは直接經驗と云ふ言葉の代りに純粹經驗と云ふ言葉をも用ひてゐる。純粹經驗とは既に屢々説かれた如く、未だ何らの思慮反省の加へられざる以前の直

接なる生命の流動の姿である。經驗と言はんより、むしろ一つの感じ (Pure experience in this state is but another name for feeling or sensation)である。それは產れたまゝの赤兒とか、睡眠、麻醉、疾病、或は打撲のために半ば昏睡狀態にあるものゝみの有し得る無反省の狀態である。單なるThatであつて、未だ特定の內容を有するWhatではない。(Essays in R. E. P. 93)それは生命そのものであり、考へられて在るのではなく、たゞひたすらに在るのである。直接經驗とはそれ故に思惟の媒介或は反省を經ざる經驗と云ふ意味に於て直接であり、その純粹の姿に於ては、かへつて所謂經驗の意味を失つて主觀客觀の對立を超越し、經驗するものなき經驗に達するのである。それは純なる合致であり、シェリングのIdentitätである。(Here one gets a new Identitätsphilosophie..... The Meaning of Truth, P, 133. Humanism is only a more comminuted Identitätsphilosophie P. 128.)それはむしろ單なる存在である。すべてのものゝ元來の姿は經驗されてあるのではなく、單に生きて在るのである。それ故ヂェイムスは自らの立場を觀念論よりもむしろ實在論に數へてゐる。"I remain an epistemological realist (The Meaning of truth. p. 195)卽ち彼は意識される事によつて世界が成立するのではなく、生きて在る處のものゝ一つの姿として知ると云ふ事を成立せしめるのである。彼はあらゆる世界の根柢を生命

の流動にをき、それを呼ぶに純粹經驗の名を以つてせんとするのである。卽ち only one primal stuff or material in the world, a stuff of which everything is composed (Essays in R. E, P. 4) としての純粹經驗から出發せんとするのである。

しからばかゝる Primal Stuff としての純粹經驗から、いかにして普通の意味に於ける經驗、卽ち主客の對立を含む認識に移り行くのであるか。純粹經驗と云ふ存在は如何にして所謂認識となるのであるか。リッケルトにとつては永遠の分割であつたこの二つの世界は、はたしてヂェイムスによつて連續的に理解され得るのであるか。

我々はこの問題を明にするためにまづ純粹經驗の直接狀態の如何なるものなるかを更に立入つて考へなければならない。

五

既にベルグソンによつて明にせられた如く、直接なる生命の流動は創造的なる連續である。生命は現在の一點に於て過去に凭れかゝると共に、未來にも凭れかゝつてゐる。生きた現在に於ては過去は單なる記憶ではなく、未來も單なる想像ではない。未來は未だ存在せざる彼岸ではなくして、既に現存する實在である。未來は疑

ふべくもなく直接に經驗される、未來は直接經驗の一片である。もしもすべてのものが現在に於てのみ與へられるものであるならば、我々は如何なる意味に於ても未來を認る事は出來ない。我々が未來と云ふ概念を有し得るのは、現在と共に同じ實在性に於て、未來が與へられてゐるからである。すべては現在に於て與へられてゐると云ひ得るなら、それと同時に、すべては未來との關係に於て與へられてゐるとも云ひ得るからである。現在卽ち未來である。しかも現在と未來とは異つてゐる。現在は未來に移り行くのである。生命はかくの如くにして連續である。many in one-ness である。矛盾の結一はそれを絕對なる神に於て求めるの要はない。最も手近なるもの、最も卑近なるものが coincidentia oppositorium なのである。

生命は連續である。連續は多なる一である。而して多なる一を構成する流れる時は、脈を打つて流れる時でなければならない。一秒の時が經過する爲にまづ½秒が經過すべく、½秒が經過する前にさらに¼秒……が經過すべきであるならば、アキレスが龜を追ひ越し得ざる如く、我々は永遠に一秒を經過する事を得ない。しかし自然は卵を造るためにまづ卵の½を造り、ついで¼を造らざる如く、しかしてアキレスが一息に龜を追ひ越す如く、我々は忽ち一秒を經過し去る。時は無限に分割さ

れたるものゝよせ集めではなくして、連續的なる前進である。時は脈を打つて流れるのである。時は滴をなして來る。Time itself comes in drops." (A Pluralistic Universe. P. 232) すべてはかたまりをなして現はれる。まづかたまりが現はれるのである。時に於ける世界が創造であると云ふ事、否、時そのものが創造である事は、この意味に於て既に動かし難い。

時が、否、生命が連續であると云ふ事、しかしてそれが創造的であると云ふ事を、上の如くに語る時、我々は直接經驗の眞相の一面に觸れてゐるのである。しかしそれは具體的なる生命の直接狀態の全部ではない。我々は、この直接經驗と云ふ經驗に於て連續と云ふ關係或は形式をも直接に經驗してゐるのである。直接經驗は單に感覺的なる素材の融合ではなくして、非感覺的なる形式もそこに織り込まれてゐるのである。未來は現在に歸入し、現在は未來に歸入してゐる。我々は連續の形式に於て合致と背離同一と差別をも知るのである。我々は連續と斷絕同一と差別を直接經驗に於て有つのである。我々はそれ故さきに掲げた Radical Empirism の要請に從つて、經驗された關係、或は形式を、その體系の内に許すべきなのである。否、否定する事は許るされないのである。＊

＊普通に純粋經驗と云ふ言葉で、何か受動的なるものゝみが、考へられてゐはしまいか。少くとも單に與へられたのみの、自らに發展を含まざるものが考へられてゐはしまいか。もし純粋經驗と呼ばれる所のものゝ内に、能動的なるもの、單に與へられたものではなくして自らを與へるもの、少くとも發展的なるものを數へ得るとすればそのものは正に何か形式的な一面を有すべきである。それ自身形式的な意味のものであるべきである。例へば時間或は自我と云ふ如きものをそこに見る事が出來はしまいか。ヂエイムスはかゝるものをも直接經驗の内にとり入るゝ事によつて、單なる經驗論を超越し得たのである。

一般の經驗論が直接に經驗されたものから出發すると稱しながら、單に雜多なる感覺をのみ實在的となし、それ以上の形式的なるものを充分に承認し得なかつたに反し、ヂェイムスは經驗の意味を徹底する事によつて、具體的なる生命に於て見らるゝ種々なる關係をも直接に與へらるゝとし、之によつて、普通の經驗論の缺點を補ひ、合理論の長處を經驗論の立場より包容し得たとなすのである。Pragmatism の冒頭に於て經驗論と合理論との區別を强靭なる心と柔軟なる心の對立に基かしめ、原理と全體とより出發せんとする "going by 'principles'" 後者に對して、部分と事實より出發せんとする "going by 'facts'" (pragmatism. P. 12) 前者に左袒する Empiricist なる事を說きつゝも、特に己れの說に冠するに Radical の一字を以つてしたのは、形式的なるものをも直接に經驗し得るとするラディカルなる態度に由來するのである。しかして經驗を能動的なるものと見、自らに發展の形式を含むとする此の思想こそヂェイム

スの思想に於て特色あるものゝ一つではないであらうか。

形式が直接に與へられると云ふ時に、しからばそれは如何なる點に於て、形式のアプリオリをとく他の多くの人々と異るのであるか。ヂェイムスはこう書いてゐる。「數年以前の事であるが、ティ・エイチ・グリーンの思想が最も強い影響を及しつゝあつた頃、私が最も惱まされたのは、英國感覺論に對する彼の批評であつた。わけても彼の學徒の一人は常に私にこう言つた。『なるほど關係の項になるものは或は感覺的なものに起原するかも知れないけれど、關係其ものは、知性の純なる作用として、上から感覺に臨むものではなくて何であらう。それは一層高次の性質のものではないだらうか』と。今でもよく記憶してゐるが、私は突然こうゆう思想から救ひ出されたのである。或る日の事私は、少くとも空間の關係は、その關係によつて媒介される項と同じ性質のものである事を認めたのである。空間の項は空間である。そして空間の關係はそれ等の項の間を滿す他の空間なのである。」(The meaning of Truth, P. 138. 139) 與へられた空間に於ては空間の形式は空間の項によつて構成されるのである。空間の全體に於て特殊なる空間が規定されるのではなく、空間の項は空間の形式を孕んでゐるのである。否、空間は常に項であると共に關係であり、關係は常に項であ

る。空間をいかに分割しても、空間は空間である。包括する空間から包括される空間を見た時、後者は前者の項であると共に、同時に前者の形式をなすのである。抽象的に考へれば一つの場所と他の場所は何等かの距離によつて隔てられてゐる。しかし場所と場所とを隔てるものは更に又他の場所なのである。空間と云ふ關係によつて結ばれてゐるそれ〴〵の項が空間と云ふ關係から成立してゐるのである。逆に云へば空間の項は空間の關係を含むのである。空間に於ては關係と項との分裂がない。無限なる空間の關係が、そのまゝ無限なる空間の項となるのである。空間が現實のものであると云ふ事、無限に與へられたものである事の證はこゝに在る。

空間に於て見られると云ふ關係と項との此の連續は、しかしながら、最も明には、時間に於て見られるのではないであらうか。流れる時から、流れるすべてものを奪ひ去つた時、我々はもはや流れる時を見る事は出來ない。現在は未來に變り、末來は現在に變る。時間の如何なる細片も亦一つの時間である。時間と云ふ關係によつて結ばれるものは又一つの時間である。しからざれば動く時間を見る事は出來ない。時間は時間以外のものを關係せしむる事は出來ない。時間の項は自らを關係として發展せしむるのである。現在が未來に成り、そしてその移り變るものを措いては

時間を理解し得ないと云ふ事は、それに基くのである。世界は時間に於て與へられると云ふよりも、時間を產み出す事によつて發展するのである。

我々は純粹經驗の世界に躍入する事によつて、流動する實在に觸れた。流れる時を見た。そして時を構成する項がそのまゝ關係である事を知つた。そこでは項と關係とが連續する。水仙と素馨とが、言はゞ香りある類似によつて結ばれる樣に、流れる時と流れる時とを結ぶものはやはり流れる時なのである。我々は此の關係に於て、あらゆる關係の原型を有つのである。"With, near, next, like, from, towards, against, because, for, through, my—"と云ふが如き言葉によつて示される樣々の conjunctive relation の型を、親密さと包括の程度に應じて並べる時に、(Essays in R. E. P. 45 參照) その頂點に立つものはmyなのである。そして嚴密な意味に於ては此の「私の」と云ふ關係も純粹經驗の連續の內に溶かされるのである。知ると云ふ關係もかゝる直接經驗の連續の上に成立するのである。知るものと知られるものとが連續する事によつて我々は知るのである。知る爲に我々は超越的なるものに飛躍するの要はない。我々は連續的なるものゝ上に於てあればいゝのである。實在と實在との特殊なる關係の連續が知ると云ふ事なのである。それ故又、知る事と實在との間に溝を飛び

越える要はない。知る事は在る事の一つの姿なのである。しからばそれは如何にしてか。（未完）

＊ヂエイムスは例へば因果律と云ふ如きものに關してもその眞の原型は自我の働きの内に見らるべきものであるとする。There is doubtless somewhere an original perceptual experience of the kind of thing we mean by causation, and that kind of thing we locate in various other places, rightly or wrongly as the case may be. Where now is the typical experience originally got? Evidently it is got in our own personal activity-situations.....As I now write, I am in one of these activity situations. I 'strive' after words, which I only half prefigure, but which, when they shall have come, must satisfactorily complete the nascent sense I have of what they ought to be. ..... It seems to me that in such a continuously developing experiential series our concrete perception of causality is found in operation. Some Problems of Philosophy P.210-211" 自我が障害にうち勝つて其目的實現する所に眞の因果があるのである。それ故ヂエイムスにとつては動力因と目的因とは自我に於ては合致する。"Since the desire of what end is the efficient cause, we see that in the total fact of personal activity final and efficient causes coalesce. P, 213."